「アテネのアレオパゴスで」　　2024年04月10日

パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あなたがたはあらゆる点で信仰のあつい方であることを、私は認めます。道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを私はお知らせしましょう。世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、人の手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と万物とを与えてくださるのは、この神だからです。（使徒 17:22 ～25）

「さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。先にお選びになった一人の方によって、この世界を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです 。」 死者の復活ということを聞くと、ある者は嘲笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。それで、パウロはその場を立ち去った。（使徒 17:30 ～33）

パウロはベレアでの宣教活動が妨害されただけでなく、身の危険があると、信者になった兄弟たちにアテネまで連れて来られた。アテネで、シラスとテモテを待っている間、町を見て回ったところ、至る所に偶像があるのを見て、憤りを覚えた。ギリシアの宗教、文化とユダヤのそれとの違いを目の当たりにした。そこで、パウロはユダヤ人の会堂で、ユダヤ人やユダヤ教に改宗した人々と論じ、また、広場に居合わせた人々と、毎日論じ合った。アテネはソクラテス、プラトンなどを輩出した哲学・知性の町で、エピクロス派やストア派の哲学者たちがいて、彼らとも論争をした。エピクロス派は「快楽主義」と訳されるが、唯物論的立場から、真の快とは精神的なもので、徳と節制に基づく心の平安を追求する哲学であり、ストア派は「禁欲主義」と訳され、汎神論の立場から、人間の目指すべき理想は、快楽や欲求の衝動に打ち勝ち、理性が与える正しい命令に従って生きることを説き、世のわずらわしさから逃れ「平安」を求める哲学で、この二派が時代の哲学の主流であった。

哲学者たちはパウロが至る所で、主イエスの復活の福音を語っているのを見聞きして、「このおしゃべりは、何を言いたいのか」とか、「彼は外国の神々を宣伝しているらしい」とか言う者がいた。そこで、彼らはパウロをアレオパゴスに連れて行き、「あなたの説いているこの新しい教えがどんなものか、説明してもらえないか。奇妙なことを私たちに聞かせているが、それが一体どんなものなのか、知りたいのだ」と言った。暇を持て余し、余裕のあるアテネ人やそこに滞在する外国人は、耳新しいことを話したり、聞いたりすることを楽しみ、時を過ごしていたのである。アレオパゴスは「評議所」で、評議、論争すべきことがあれば、人を集めて話し合う場であった。パウロは知性を誇る哲学者たちからアレオパゴスで話をする福音宣教に有用な機会が与えられたことを喜び、準備した。

パウロはアレオパゴスの真ん中に立って説教した。「アテネの皆さん、あなたがたはあらゆる点で信仰のあつい方であることを、私は認めます。道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけた

からです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを私はお知らせしましょう」と語り始めた。パウロは諸々の偶像を見て、憤りを覚えたのに、アテネの皆さんは信仰深いと持ち上げ、あなたがたが拝む神々の中に「知られざる神」と刻まれた祭壇を見つけので、知らずに拝んでいるものをお知らせしましょうと、巧みな導入をしている。会衆はパウロの話に一気に引き付けられただろう。そしてパウロは、「知られざる神」は「世界とその中の万物とを造られた神が、その方です」と、神は万物を造られた創造主であると続けている。神は天地の主であるから、人の手で造った神殿などにはお住みにならず、人の手で仕えてもらう必要もなく、全ての人に命と息と万物をお与えくださる方である。

神は民族を作り出し、地上の全域に住まわせ、境界を決め、季節も定められた。これは、神を求めさせるためで、探し求めさえすれば神を見出すことができる。実際、神は遠く離れてはおらず、私たちは神の中に生き、動き、存在している。あなたがたのある詩人たちも「我らもその子孫である」と言っている通り、私たちは皆、神の子孫であるから、神は技や考えで刻んだ金、銀、石などの像と同じものではない。パウロの説教は自然神学的要素もあるが、徹底して偶像は神ではなく、神殿に神はいないと語っている。

ここから、パウロの説教の本論に入る。神は無知な時代を大目に見ておられたが、今はどこにいる人でも皆、悔い改めるように命じておられると言い、「先にお選びになった一人の方によって、この世界を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです」と告げた。死者の中から復活させ、神が世を裁く日をお決めになったことを、全ての人に確証をお与えになった。パウロの語る福音は主イエスの十字架と復活に神からの義に与る救いで、主イエスの名は出していないが、死者から復活に神の裁き（救い）が成就、実現したと語ったのである。パウロの説教の核心、死者の復活ということを聞くと、ある者は嘲笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言って、死者の復活などあり得ない愚かな話と、哲学者たちは背を向け立ち去った。パウロは知恵と技巧を尽くし、言葉巧みに説教し、数人の信者を得たが、宣教の対象とした哲学者たちからけんもほろろに扱われ、すっかり憔悴し切って、南下してコリントに向かった。

パウロに学ぶ－ギリシア・トルコ旅行で、アレオパゴスに行き、その岩を上ってみると、目の前にパルテノン神殿があった。パルテノンはアテネ人が誇りとするギリシアの神々が祀られた壮大な神殿であるが、パウロは、この神殿は神不在であると言い切っている。この場で、こんな説教をするのかと、パウロの宣教の迫力に圧倒させられた。

アレオパゴス

アレオパゴスのパウロ碑文

アレオパゴスからのパルテノン